在宅医療の現場を高橋伴明監督が映画化

自宅で最期を迎えたいと望む患者の在宅医療を支え、2500人を看取ってきた兵庫県尼崎市の長尾和宏医師(62)。病だけではなく、人間と向き合う長尾さんの著書に感銘を受けた高橋伴明監督の最新作「痛くない死に方」が完成した。柄本佑、奥田瑛二、大谷直子など実力派の俳優が出演。なかでも、末期がん患者を演じた宇崎竜童の白髪をさらしての熱演は見ものだ。

試写会の舞台で高橋監督は「自分が今考えている理想の死に方を描きました」と挨拶。

試写会で舞台挨拶に立った長尾医師(左)と高橋監督(右)

長尾さんは「映画の中で奥田さんは、僕の魂の叫びを全て代弁してくれています。在宅死は家族にとっても不安になる。患者は亡くなる半日から一日前に熱いと言って窓を開ける、服をはだける行動がある。お産の陣痛みたいなもので、軽い人も重い人もいることを話し、乗り越え方を伝えている。この映画では、最後にゆっくり顎を振るような呼吸になって亡くなるまでがリアルに描かれています」と語った。

いつかは訪れる終末期。病院か在宅か、について考えさせられる作品である。

3月5日上映/テアトル梅田、なんばパークスシネマ他。

※長尾医師の日常を克明に記録したドキュメンタリー映画「けったいな町医者」は、なんばパークスシネマ他で上映中。3月20日から第七芸術劇場(十三)。